花道全書

仁

特258
623

始

特258
623

告文

我吉備專敬流は昭和七年十二月十一日を以て吉備の地に呱々の聲をあげ不肖其の第一回總督の任に就く惟ふに從來の花道は秘傳を設け且門下に對し研究の自由を拘束して其の流派の外に出づることを聽さず故に花道創始以來數百年の久しき今尚舊套を墨守して時世の進運と伴はず大に遺憾とする所なり元來花道は宇宙の眞理を含み精神を陶冶して仁義五常の道を敎へ究極する處藝術なり當流

は秘事を明にし秘傳を公開して修得に便ならしむると雖
も其蘊奥はよく傳授し得べき所にあらず廣く討尋し深く
研鑽し不撓不屈以て所期の目的達成に努力せられんこと
を敢て一言す

昭和八年二月十三日

吉備専敬流
總督　清流亭錦勝

花道全書　仁之巻

目次

一　花道區分の事
一　花道基礎の事
一　序破急の事
一　曲流の事
一　花手前の事
一　床勝手の事

一　床名稱の事
一　懸物付名の事
一　生方勝手の事
一　序破急寸法の事
一　生花眞行草の事
一　花器置樣の事
一　置花生方の事
一　寸切及薄端生方の事
一　副の事

一　四季生方の事
一　生け花置樣の事
一　花拜見仕樣の事
一　草木個性の事
一　桃生方の事
一　撫子生方の事
一　梭欄生方の事
一　寒暑により花器に水注き樣の事
一　花巾の事

一　花盆の事
一　花器定法の事（一）
一　初學者心得の事

花道全書　仁之卷

一花道區分の事

花道には生花、投入、盛花の別あり又盛花には色彩を本位とする色彩花と山野水邊の景を象りたる景花とあり。

一花道基礎の事

花道には花形を構成する技術とこれか理論とあり花形は天地人の三才にして當流にては序破急と云ひ理論は

陰陽の二にしてこの兩者の和合を以て祝儀となす。

一序破急の事

序とは物の初めに靜なること、破は序を破つて趣を變へ急は勢烈しく速なるの謂にして立伸びたるを序と云ひ序に添ふて中程にあるを破と云ひ留花を急と云ふ。

一曲流の事

約すれは序破急にして布衍すれは序破曲流急なりかの

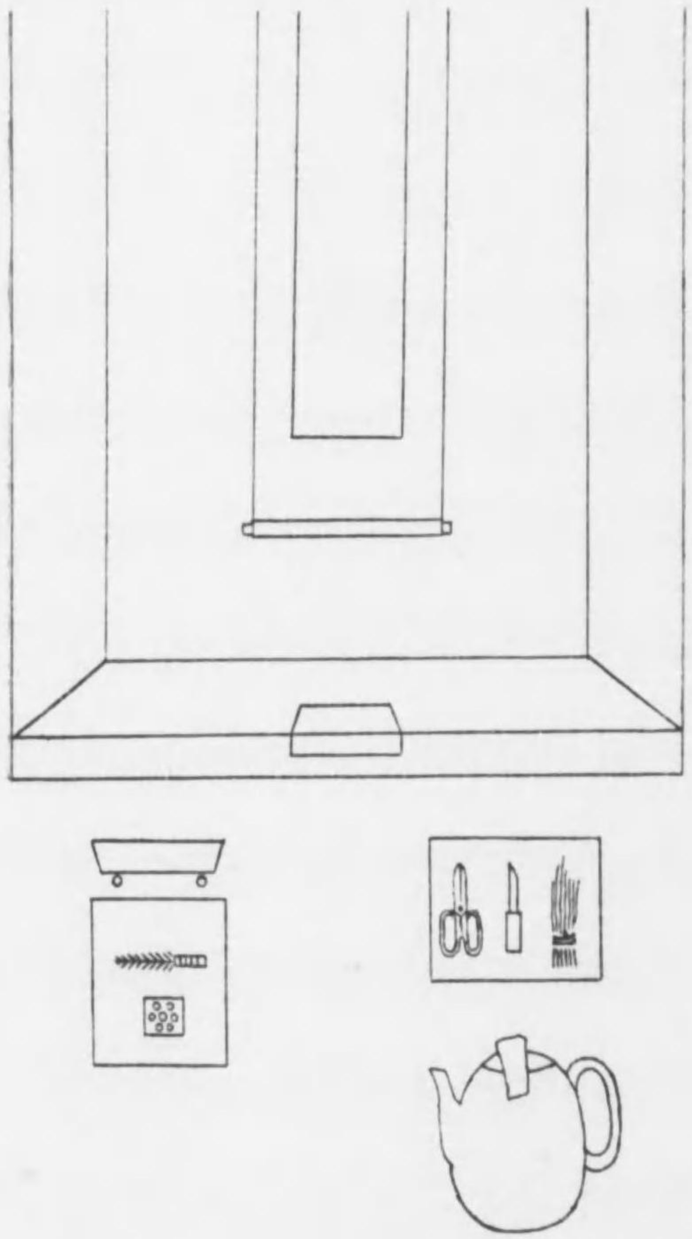
山水畫の高峰の頂上、群山の端、夫等の溪谷より湧出する流水、山麓の小丘、中部に繁茂せる深林若くは巨巖の曲線は卽頂端曲流丘にして文字を變へて序破曲流急なり。

一花手前の事

花道は客に對し尊敬第一なり左れば物を置くには作法あり事を爲すには禮儀あり其禮儀作法に違ふことあるべからず。

主人より客に對し花を所望する時は花器を貴人疊の軸先小矩の床前に置き其脇に薄板又は花臺に花留羽箒を載せて置くなり又花盆に花枝、鋏小刀等載せて軸脇小矩の床前に置き次に水指に花巾を載せて其脇に置くなりこれ飾付なり左圖の如し。

客は進みて先づ花留は花器に羽箒は花盆脇に直して薄板又は花臺を床に置きて花器を載せ次に懐紙或は手拭の類を床椽にかけ其上に鋏を置き花枝を調べ若塵埃又蜘蛛の巣の類あるときは羽箒にて清め序破急の花枝を



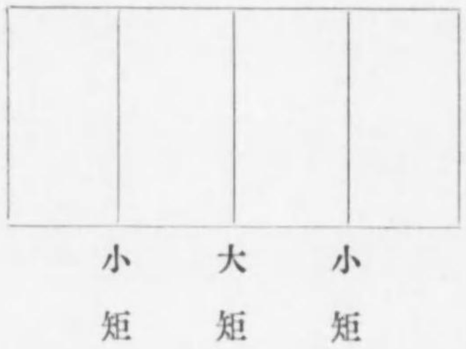
選別して靜かに手早く生くべし生け終りたるときは花器を定めの場所に直して水を注ぎ摘み屑は羽箒にて懷紙に掃き寄せて花盆に入れ置き羽箒と水指とを次の室に持出して元の座に歸り挨拶して非難の箇所を尋ね一同拜見し終りて花盆を引くなり若水足らざるときは主人これを注ぐべし。

一床勝手の事

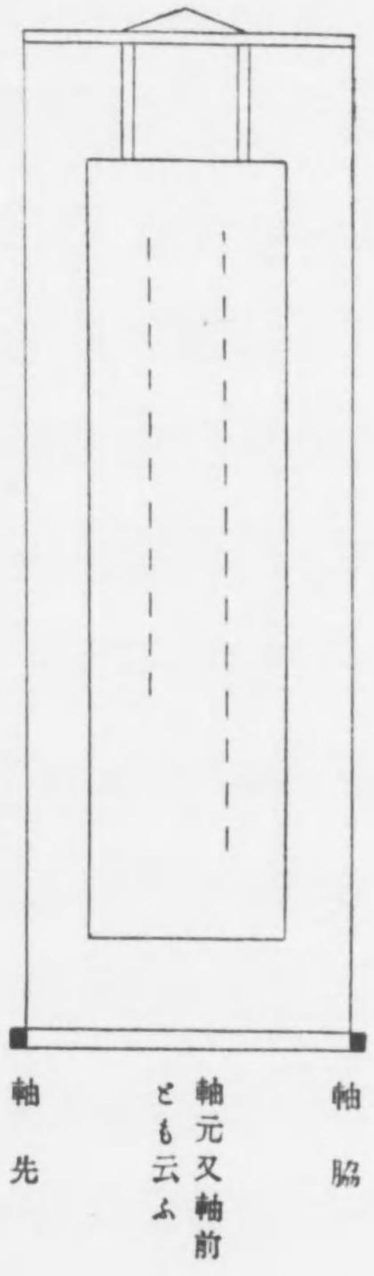
床の方に向ひ右にあるを本勝手床と云ひ左にあるを逆

勝手床と云ふ。

一床名稱の事



一懸物付名の事



明り請の方を軸脇と云ふ流儀あれども右圖の通にして明り請と否とに拘らざるなり。

一生方勝手の事

生け花の破の手の左方に出づるを本勝手右の方に出づるを非勝手又は逆勝手と云ふ。

一序破急寸法の事

生花は床の大小又は花器の大小によりて一定し難しと雖大凡の定法を知らざれば迷ふ事あり卽置瓶なれば其高さ廣口なれば其差し渡の二倍半にして破は序の約七分急は序の約半分と知るべし。

一生花眞行草の事

生花に眞行草の區別あり眞とは書體に於ける楷書の如く行は行書の如く草は又草書の如くにして嚴正より次第に略儀に崩したるものなり花形について云へば眞とは縱の三角行は眞の稍崩れたるもの草は横の三角と知るべし。

一花器置樣の事

床に花器を置く場所は大矩又は小矩を法とす。

一置花生方の事

眞行草何れの花形をも生くと雖も普通には只素直に立延びたる體よろし蔓物垂物にして餘り垂れ下りて花器縁にかゝるを嫌ふなり。

一寸切及薄端生方の事

寸切及薄端共に生花眞の花形を生くべし。

一副の事

副とは主花に對する副花の意にして主花の枝葉薄き場所に生くべし。副に根元副、懐副、株分副、前副、後副の別あり。

一四季生方の事

春　明り勝手に枝葉を出すべし序破急共に賑かに只長閑なる體を宜しとす。

夏　水際隨分涼敷綺麗に生くべし破急の枝葉水に映る體を宜しとす。

秋　破の枝隨分重く生べし總て枝葉淋しき體に生くべし。

冬　冬は草木の氣根に歸へるものなり故に急の枝葉重く水の見へぬ樣生くべし又破の中程を透し奥深く一本見せることありこれ冬枯にて枝あらはになりたる體なり。

一生け花置樣の事

本勝手の花は向つて床の左小矩に逆勝手の花は右小矩

に置き懸物二幅對の場合は大矩に置く又懸物二幅對にして花三瓶なるときは小矩大矩小矩と置くべし。

一花拜見仕様の事

花を拜見せんとするときは貴人疊を遠慮し其の前に座し先づ懸物を見て後生けたる人に對する心を以て花に向つて一禮すべし若し主人より近く進んで見んことの挨拶あるときは足指の貴人疊に乘らざる迄摺出て表左右を能く拜見し再び一禮して退くを法とすれども貴人

の生けし花なるときは第一に花を拜見すべし又卓莊あるときは最後に見ると知るべし。

懸物二幅對花一瓶の時は花を大矩に置くこと法則なり此の時は上座の懸物を見て花を見次に下座の懸物を見るなり。

懸物三幅對花二瓶の時は中尊を見て上座の花を見上座の懸物を見て下座の花を見次に下座の懸物を見るなり。

一草木個性の事

草木には直に延びるもの、地上を匍匐するもの、他物に纏つて上昇するもの等あり又葉の出づるに先つて花の咲くものあり花道はこの個性を尊重し法則に從ふて生くること緊要なり。

一桃生方の事

桃は素直に生くべし矯すべからず桃色は上に白を次に緋色は下に遣ふべし。

一撫子生方の事

序に苔を破急花を遣ふべし絞色を上に白を次に赤を下に遣ふべし。

一梭欄生方の事

根元に苞毛を遣ひ葉にて序破急を取るべし葉は摘みて遣ふ全體低く目に生くべし。

一寒暑により花器に水注ぎ様の事

花器に水を入るに冬より春迄は八分、夏より秋迄は九分なり但暑中には九分半迄は差支なし。

一花巾の事

花巾は白布長八寸幅四寸か又は長幅共七寸にすべし折様は横三つ縦四つを法とす。

一花盆の事

花盆は大小二種あり。

大　一尺二寸四方　高六寸足付

小　八寸四分四方　高四寸足付

を定法とすれども利休形或は雪江好等と稱する大盆あり。

花盆を持つには右手を花盆の下に入れて支へ左手にて其縁を持つべし。

一花器定法の事（一）

花器の定法下の如しと雖恰好物なれば見計ひ切りて差

支なし。

寸切　又直切とも云ふ長は竹の周圍と同寸にして節上六節下四の割合に切るべし。

二重切　月輪八分釘穴は八分下りて長さ六分巾三分これを八下六三と云へり上窓は下窓より廣くし下の節下は二寸乃至三寸迄竹の大小によるべし一重切は之に準すべし。

一初學者心得の事

凡そ何れの道を問はず其の志す道に入らんには初め相當の覺悟なかるべからず多くは良師に就けば自然に上達するものと合點し又甚しきは花道は餘藝なり只一通り心得あれば充分なりとする人尠からずされどかゝる人は假令修業するも其の目的を達すること能はず寧ろ初より學ばざる方宜し故に花道を學ばんとせば入門の始め充分の覺悟あること肝要なり左に三進を示さん。

第一を意進とす意進とは心進むことにして心進まざれば花進まず又意低ければ花に氣品なく意進むに從つて

品位高尚なり今其の一端を云へば大凡花を生けんとするときは先づ一切の邪念妄想を拂ふべし邪念妄想を懷て花に對すれば生け上げたる花は品位なく又下劣なり古來花は其の人の心を顯はすと云ひ心の花を生くとも云へり心もとより見るべからず花の品位は形態の善惡にはあらず譬へば人の品位は醜美にあらざるが如し誠に花に對し一意專心花三昧に入り入我我入の境に座して生け終りたるときの花と妄想邪念を懷て生けたる花とを比較せよ自ら雲泥の差異あるべし如斯にして次第

に修業するときは意自ら進まん實に花道は單なる手藝にあらずして精神修養術たることをも自覺すべし。

第二を理進とす花道は理を以て成る理に適はざれば如何に面白く出來たりとも良花とは謂ひ難し當流にては草木の天地間に生をうけ自然に雨露の恩惠に浴して生育すること各草木の個性及榮枯開萎時を違へざる有樣を其のまゝ花瓶に移すを根本とし草木の大小强柔表裏等を以て陰陽に配當し其の和合を以て法とし序破急を以て則とすこの序破急の位置宜しきを得ざれば花態備

はれりと云ふべからず誠に天然の草木を視よ梢枝自ら序破急あり此の妙則を悟り以て剪鋏を携へて花枝を選定するに誤ることなし又購入する一把の花枝も捨つべき冗枝の少くして巧妙の花を生け得るに至らん。第三を業進とす以上意進めば業自ら進むの道理にして意進まず理に暗くして業の上達することなし故にこの三進は花道修業の要諦なり。

仁之巻終

昭和八年三月三十一日初版發行
昭和十年五月十五日再版印刷
昭和十年五月二十五日再版發行

（非賣品）

編輯兼發行人　岡山市東田町八〇番地　吉備專敬流代表者　長尾俊憲

印刷者　岡山市東中山下一二三番地　村本万龜男

印刷所　岡山市東中山下一二三番地　研精堂印刷所

發行所　岡山市内山下二〇番地　吉備專敬流本部

不許複製

終